CPD 講座

オランダの近代産業遺産の保存と活用

第2回

デン・ヘルダー海軍工廠の保存と活用

Ivan Nevzgodin（イワン・ネブツゴティネ）■デルフト工科大学 准教授
翻訳＋編集…北尾靖雅

ウィリアムソード海軍工廠の再生事業

デン・ヘルダーは北オランダ州の北の岬の先端に位置する北海に面した港湾都市である。この地に海軍工廠を建設したのはナポレオン・ボナパルトである。ナポレオンはデン・ヘルダーを「北のジブラルタル」と名付け、ナポレオン帝国の軍事拠点として軍港を設置した。オランダ国王のウィリアムを記念して、現在はウィリアムソードと呼ばれている（本稿では海軍工廠と表記する）。

海軍工廠の再開発事業は四半世紀にわたるもので、対象エリアは約40a（4,000㎡）、主な建造物は19世紀に建設され、オランダにおける広大な産業用地の活用事例の代表例の一つである。

1992年以降、オランダ海軍は徐々に海軍工廠から撤退を開始した。海軍は撤収を決めていたので、建物などの維持管理に経費を使っていなかった。

当時、産業用途の広大な敷地を再生した事例はオランダにはなく、持続可能な再生の原則もなかった。加えて、デン・ヘルダー市は人口減少の問題も抱えていた。そこに、150年間、市民の立入りが禁止されていた敷地を自治体が保有することになった。そして、この海軍工廠跡地を「海外のオランダ」というテーマパークと600戸の住宅地に転換する試案が作成された。自治体は政府や民間部門との協力を模索し始め、自治体は欧州連合とオランダ政府と州から財政的支援を得た。

1997年11月には敷地全体が国の記念物に指定され、同年、オランダの政府建築家バイテッセ・パティヤンは「クオリティ・チーム」の責任者となった。このチームは海軍工廠の文化的、歴史的、建築的、都市的な観点から質的な保証をする役割を担うことを意図していた。

写真1　デンヘルダーの市街地とウィリアムソード海軍工廠跡地の航空写真（原著者提供）

海軍工廠の基本全体計画

海軍工廠の再整備基本全体計画は1998年9月に自治体が決定した。計画には1834年に海軍工廠に計画された時の美しさ、秩序と論理が描かれていた。魅力的な活用のために映画館、航海博物館、カフェ、レストランが計画された。クオリティ・チームは、質の高いデザインの決定に介入し、海軍博物館や国立救命艇博物館が設置された。

建築家のエリック・クニッペルスは、既設建築に追加する設計をした。それは、長い鋼製の入口で支えられている箱形の建物だった。2001年から2003年にかけて、映画館とファミリー・エンターテインメント・センターが開設された。4つのオーディトリアムは既存の建物を用いて、既存の空間の中に配置された。2つのオーディトリアムは新しい位置に配置された。

写真3　海軍工廠の建造物の改修事例（建造物No.51）（原著者提供）

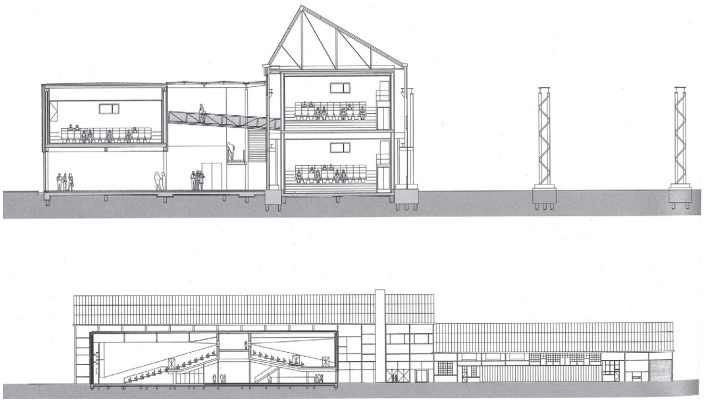

図1　建造物No.51の断面図（原著者提供）。写真3にみられるように、既設建築に箱形のボリュームを追加する形で改修している

オーディトリアムの音響は重要である。複数のオーディトリアムを配置する計画では、相互の施設から発せられる音響による振動を排除する必要があった。そこで、独立した基礎をもつ「箱」を設置することとなった。このことで音響の問題を解決した。既存の産業遺産の分析を通じて工場施設を活用する可能性が発見された。

再整備の資金調達

保存活用に必要な資金は政府から得た。しかし、国からの助成金を受ける条件として、民間部門の参加が盛り込まれていた。そこで、デン・ヘルダー市は民間会社のリベマ社を協力者とした。リベマ社は、海軍工廠の敷地を再開発するためにレジャーパークとすることを提案した。テーマはオランダの東インド会社の栄光を示すことだった。

歴史的史実の観点を考慮すれば、19世紀のオランダ海軍施設を東インド会社と組み合わせることには無理がある。東インド会社は17〜18世紀の史実である。しかし、市民を惹きつけるために東インド会社の要素が取り入れられた。帆船のレプリカを日本の長崎オランダ村から購入して、そのレジャーパークに設置した。リベマ社の計画は現実になった。

リベマ社の誤算の一つは、レジャーランドの訪問客に対して、あまりにも野心的すぎる、ケープ・ホーランドのテーマを押しつけた点にあった。敷地への良好なアクセスは敷地活用の主要な観点である。しかし、地元の住民はレジャーランドに入るために金銭を支払わなければならなかった。

一方、政府の助成金は、建物の構造の外観を修復する目的のためにのみ用いられた。建物の外観のほとんどは修理され、補強された。しかし、既存建築物の内部に十分な費用を投資することはできなかったので、建物の活用を担うテナントを獲得することが困難になった。

その後、2006年に、リベマはレジャーパークの運営から撤退し、海軍工廠の所有者として自治体は負債を背負うこととなった。海軍工廠の資産を維持・管理するために、2007年に自治体は独立したウィリアムソード社を設立して問題を解決する方法以外には選択肢がなくなっていた。ウィリアムソード社は敷地の維持管理費用を切り詰め、従業員数を減らし、活発な営業が期待できるテナントの獲得を進めた。そして、マネージメントの改善を伴う新しい開発企画を創り出して市場開拓を始めた。その結果、ウィリアムソード社の経営は良好になった。

写真2　海軍工廠内の景観（原著者提供）

劇場の再整備

1965年竣工のデン・ヘルダー劇場の解体後、劇場機能を海軍工廠へ移転させた。デ・カンパーニェ劇場を新しい文化センターとして海軍工廠の敷地に建築することは、敷地を活用するために重要なことだった。

デ・カンパーニェ劇場は2015年10月16日に開場した。設計はファン・ドンヘン＝コズチューチェ建築計画事務所が担当した。建築物はオーディトリアム、多目的ホール、芸術センター、オフィスとレストランで構成されている。デ・カンパーニェ劇場を建築するた

めに、いくつかの古い建物の結びつきを強める必要があった。施設は金属工場（1918〜1920年竣工）に設置された。この建物は、工場施設群の中でもっとも大きな建物である。

担当した建築家たちは、変更と追加を注意して行った。彼らは材料とディテールについて慎重に考慮した。建築的観点で、再生するために、古い要素と新しい建築の要素を対照的に扱った。それぞれに微妙な違いがみられ、古い要素から新しい要素へと目立たない変化が取り入れられた。特に、ガラスの使い方で成功した。工場施設群に対して、人々の経路選択の使いやすさが考慮され、より強調された。

デ・カンパーニェ劇場の機能的な空間構成の特徴は、敷地の環境に完全に統合されている点である。古い素材工場の建物のシルエットは、深みのある銅メッキで覆われたフライタワーを受けている。夕方と夜にはフライタワーは繊細にデザインされた照明により遠方からもよく見える。

古い要素と新しい要素の組合せは、強い建築的な効果を表現する。古い鉄骨の構造、垂木や梁の構造が劇場空間の一部となっている。見えるものをすべて見せる劇場が設計された。

広大な敷地を持つ産業遺産の保存と活用

海軍工廠の敷地を再整備する経験から、広大な産業用途の敷地を用途転換することに関して、次のような教訓が得られた。

建物と敷地の修復は、常に新しい用途や機能とともに考慮されなければならない。それは長期の財政的な裏付けの可能性に基づく。したがって、修復工事を行うためには、長期的な期間を想定した維持管理に関する対処を考慮する必要がある。

次に、テーマ、機能、利用者が混在することで、事業が後退する場合がある。そこで、事業推進を妨げる要因に対応するための準備が求められる。同時に、一時的な敷地の利用と活用を整備事業に導入することも良好な結果を導くことにつながる。

さらに、修復事業の進捗において、事業推進を導く専門家として政治家、都市プランナー、政府建築家、建築家、遺産の専門家が関与することは非常に重要である。明快な事業運営では、事業に関与する当事者たちの興味関心の拡散による混乱が生じることを防ぐことは重要な課題である。

保存委員会は1997年に工場群の都市的な価値を認め、全体基本計画における要点となった。そこで、敷地内の建造物はガイドラインを根拠として保存された。保存計画は敷地全体としての統合性に加え、場所に対する適切さに関して考慮される必要がある。

海軍工廠の歴史的建造物の改修工事では、より一層慎重な注意が払われたので、海軍工廠の施設の教育的な役割を強化できた。具体的には、建築物を構成する木材、鉄、鋼材と鉄筋コンクリートの技術的発展過程が可視化された。

ここで、『ロンリー・プラネット』という旅行書を見てみると、この旅行書では、欧州の最高の目的地として、オランダ北方のテセル島を示したことに注目できる。この島は旅行書の2016年度の欧州リストの9番目に位置づけられた[註1]。島にはフェリーで行くので、海軍工廠の敷地は旅行ルートの上にある。テクセルに行く多くの観光客が、海軍工廠の敷地を通過する。マーケティングと都市計画は、観光客にそれとなく海軍工廠の跡地を訪問することを仕掛けたとも言える。

海軍工廠の左右対称の南北中心線がよくわかるようにしたことは、敷地の建築物群を再編成する重要な再整備の方法となり、海岸の遊歩道は海軍工廠に魅力的な場所を提供している。ここは、1811年10月にナポレオン・ボナパルト皇帝が視察した場所であり、この場所で固有の歴史的な感覚を経験できる。

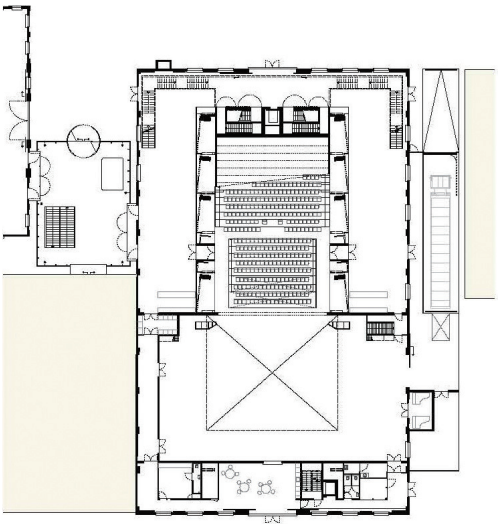

図2 デ・カンパーニェ劇場の1階平面図（作成…Van Dongen Koschuch Architects and Planners、原著者提供）

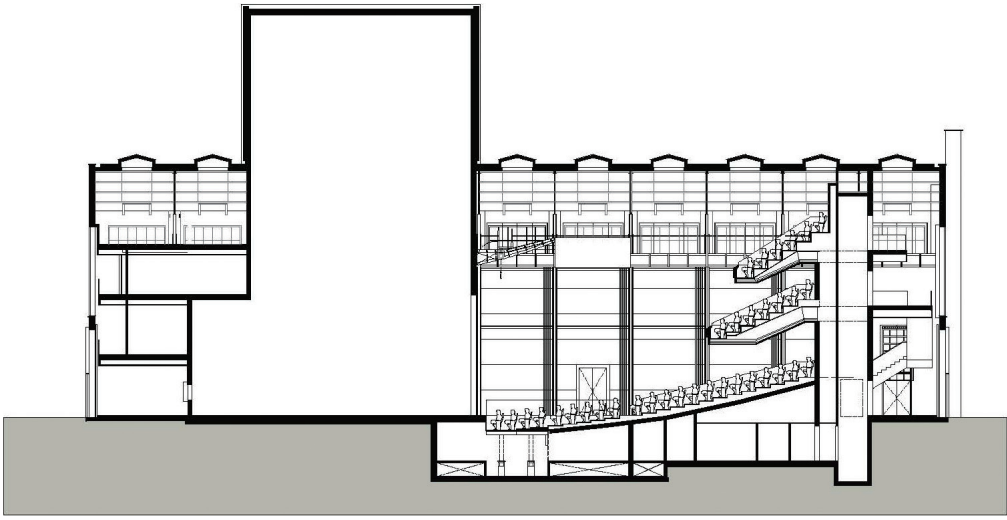

図3 デ・カンパーニェ劇場の断面図（作成…Van Dongen Koschuch Architects and Planners、原著者提供）

写真4·5　デ・カンパーニェ劇場の内部および客席（2015）（原著者提供）

まとめ

産業遺産に対する取り組みの変化

19世紀から20世紀の産業建築は、現代建築の背景として重要である。当初、産業施設の再生は個別の事業として始められた。建物の用途や機能的な追加によって、古くなった工場建築と新しい現代建築との対比を示すことがめざされた。その後、都市の構造と産業の発展過程を容易に理解できるような統合的なアプローチが必要となった。

海軍工廠の事例により、建築物の生産技術の変化の過程が示される建物群によって、工場施設全体が都市的な構成になっていたことがわかり、この点に関心が向けられた。

今日、産業遺産や機械と技術的施設は保存される都市の重要な構成要素として理解されている。産業が存在した場所の性格とその健全性を尊重する持続可能な再活用は、普通のプロジェクトより多くの時間を必要とする。長い時間のかかる再生のプロセスとそれに関係する明確なビジョンは、広大な産業遺産の敷地に残る建築物群の再生に必要不可欠である。

こうした産業遺産に対するアプローチと考え方は、「スローアーバニズム」として、オランダでは人々の関心を集め始めている[註2]。

謝辞
本稿は科学研究費16H02386の研究の一環として行った。また、前号（2017年11月号）に示したように、神戸で本稿に関する発表の機会を与えていただいたひょうごヘリテージ機構に謝意を表する。

註1　http://www.dailymail.co.uk/travel/travel_news/article-3604704/Croatia-s-rugged-coastline-hip-Danish-city-home-Shakespeare-Lonely-Planet-reveals-Europe-s-best-destinations.html Last retrieved on the 1st of September 2016. 参照（2016年9月1日閲覧）

註2　http://www.slow-urbanism.org/English/English.html 参照（2016年9月1日閲覧）

註3　本稿の原著論文は2016年11月の「近代の産業遺産の保存と活用に関する国際シンポジウム：近代の産業遺産の保存と多様で魅力的な活用――日本、オランダ、イタリア、台湾の事例」（舞鶴）で発表された以下の原著論文に基づいている。“A Paradigm Shift in the Adaptive Reuse of Dutch Industrial Heritage in the 1990-2010s”, Ivan Nevzgodin,2016, Maizuru, Japan

イワン・ネブツゴティネ
オランダの港湾都市の船舶関連施設の保存活用に関わる近代建築史の研究者。ソビエト連邦の工業都市の研究やオランダ、ロシアを中心に修理や保存の研究を展開している。博士論文（デルフト工科大学、2004年）は、「西シベリアにおける近代建築運動の影響――1920年代から1940年代の建築と都市計画」。著書に『ノボシビルスクの建築』（2006年）など

自習型認定研修の設問

設問1

現代のオランダにおける産業遺産の保存と活用に関する社会的関心はどのように呼ばれているか。

a. ファースト・アーバニズム
b. スロー・アーバニズム
c. アーバニズム・ファースト

設問2

オランダでは広大な面積を有する産業用地の再整備を行う場合にどのような考慮が必要と考えられているか。

a. 文化財保護に関わる手続きを簡素化すること。
b. 都市計画の考え方を導入すること。
c. 一敷地一建築の原則に基づいて確認申請を行うこと。

CPD

認定教材の設問への回答は、
CPD情報システムのページ
https://jaeic-cpd.jp/
にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、
単位に登録できない場合があります。
※自習型教材の選択欄における、
会誌『建築士』選択項目は、
平成28年1月より建築士会会員のみの
表示項目になります。